

令和5年度（2023年実施）大学入学共通テスト「世界史B」について

1. はじめに

今年度の世界史Bの大学入学共通テスト（以下、共通テスト）を含む、過去3回の基本情報は次の表の通りである。

◎過去3回の共通テストの比較表

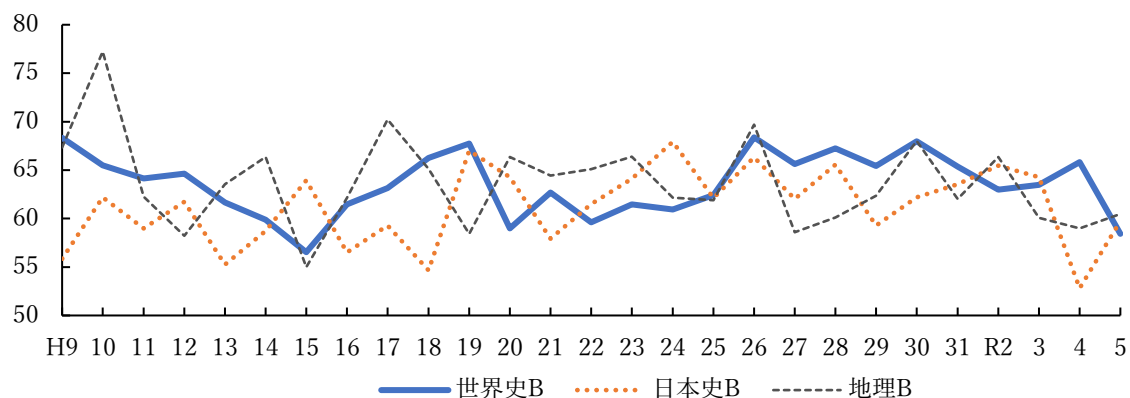
	令和3年度※1	令和4年度	令和5年度
大問数	5題	5題	5題
小問数	34問	34問	34問
ページ数	30ページ	28ページ	32ページ
資料（資料・写真・図・地図・表など）	17点	13点	21点
平均点	63.49点	65.83点	58.43点

※1 1月16日実施分

今年度の共通テストの大問数と小問数は、令和3年度（初年度）の共通テストから変わらない。しかしページ数は、昨年度の28ページから32ページに増加している。資料点数は、昨年度の13点から21点と大きく増えている。今年度の共通テストでは、資料に関連する会話文という導入がとられ、この形式がほとんどを占めることが、ページ数に影響していると思われる。

今年度の平均点は、昨年度から大きく下がり、60点を下回った。大学入学センター試験（以下、センター試験）時代の世界史Bの平均点は、平成26年度に68.38点となって以降、65点前後を推移してきた。今年度は、センター試験と共通テストをあわせた直近の10年間で最も低い点数となっている。ただ平均点は、世界史としては低くなったが、今年度の地理歴史の他科目を見ると日本史Bは59.75点、地理Bは60.46点であり、科目間での差は昨年度よりも小さかった。

◎世界史B・日本史B・地理Bの平均点の推移（平成9年度以降）



今年度の出題内容・出題形式は、昨年度までの傾向と大きな違いは見られなかった。

今年度の時代・地域別の出題数を見ると、時代は中世が多く、昨年度と比べて古代が増えた一方で近・現代は減少した。地域は西欧・北米と東・内陸アジアの出題が多かった。単年では出題される時代や地域には偏りがあるものの、数年間を通して時代や地域をまんべんなく出題しようとする意図がうかがえる。

◎過去3回の共通テストにおける時代・地域別の出題数^{※1}の比較表

時代 ^{※2}	令和3 年度	令和4 年度	令和5 年度	地域	令和3 年度	令和4 年度	令和5 年度
古代史	3	0	5	西欧・北米	10	6	13
中世史	2	9	11	東欧・ロシア	5	3	5
近世史	5	3	5	東・内陸アジア	8	10	9
近代史	11	9	6	南・東南アジア	4	4	1
現代史	6	8	5	西アジア・アフリカ	1	4	4
[うち戦後史]	3	4	1	中南米・オセアニア	0	4	1
複数時代混合	7	5	2	複数地域	5	3	1

※1 令和3・4年度の出題数は「大学入学共通テスト問題評価・分析委員会報告書」による。令和5年度はハピラルによる推計。

※2 中世(5c~14c)・近世(15c~17c)・近代(18c~19c)・現代(20c~)を目安とする。

出題形式については、今年度の共通テストには、世界史の知識そのものを問う設問とあわせて、思考力・判断力が求められる設問が出題されるといった、昨年度までの傾向が引き継がれているが、今年度の共通テストには細かい点での変更が少なくない。例えば、今年度はページ数、資料点数が多く、文章を読む時間を要するようになっている。設問では、細かい知識を問われるわけではないが、選択肢の判断が複雑になっているものも多く見られる。これらの変更点が難化につながり、今年度の平均点が下がる結果となったのではないかと考えられる。次のポイント解説で、今年度の特徴について詳しく述べたい。

2. ポイント解説

2. 1. 共通テスト「世界史B」の傾向と今年度の変更点

①会話文形式

世界史の共通テストでは、大問の導入に会話文、説明文、資料単体など様々な形式が取り入れられている。今年度は、大問のほとんどが会話文形式のリード文となっており(第2問-B, 大問4-Cのみ「資料とその説明文」という形式)、分量も増加し、資料を交えて2ページにまたがる会話文も多くなった。また今年度の会話文には「大学のゼミ」(第

1問-B)、「大学生と教授」(第3問-C)のような、大学入学後の学びを意識したと思われる場面設定も随所で見られた。

②資料・文章とそれに関連する設問

共通テストでは様々な種類の資料が出されており、その中には初見の資料も多く含まれる。今年度も様々な資料が用いられているが、紋章と家系図が初めて出題された。

共通テストでは、資料や、資料に関する文章を読み、選択肢の正誤を判断する設問が多く出題されている。昨年度までは、初見の資料であっても、その資料を知らなくても解ける工夫がされており、その結果単純な資料の読み取りだけで解答が絞れる設問が見られた。しかし今年度は、資料や文章から読み取るだけでなく、内容を整理し、該当する文を選ぶ設問が増えた。さらに、細かい知識は不要であるが、教科書で学んだ基礎的な知識を資料の内容と結びつける設問も多く見られ、単純な読み取り問題は減少した。

③リード文に関連する設問

共通テストでは、リード文と設問の関連が意識されており、リード文中の下線部の事項を直接問う設問、文章中の空欄に関する知識を問う設問が多く出題されている。設問の内容を把握するためにリード文を見返す必要があり、文章を読み飛ばしにくい。今年度は、昨年度よりもリード文を見返す頻度が増えているように思われる。

リード文に関連して、文章中の空欄や、下線部で具体的な事項を示さず、知識を問う設問も出題されている。例えば「空欄 の歴史について述べた文」という設問では、空欄に入る語句を特定した上で、空欄に関連する事項を判別する知識が必要となる。今年度もこのような二重に知識を問う設問が出題されている。

④地図問題・年代整序

地図を用いた設問は、昨年度の共通テストでは3問出題されたが、今年度は1問に減った。昨年度までと同様に、具体的な地名を伏せて地図中の位置が問われている。今年度の出題は1問でも、異なる2つの地域の組合せ問題となっている。また今年度は、文章から読み取った内容を基に地理的な位置関係を考え、その上で解答する設問も出題された(第2問-問4の半島)。

年代整序は、昨年度は出題がなかったが、今年度は1問出題された。今年度も令和3年度と同様の形式で、出来事を年代順に配列するのではなく、資料1～3に記された出来事や事柄の年代を特定した上で資料を年代順に配列するという内容であった。

2. 2. 今年度の具体的な設問

○資料と文章の読み取りに加えて、世界史の知識が必要な設問

大問2-問1 (解答番号)

アンリ4世から始まる王朝の紋章の図柄に関連する会話文と、フランス王家の家系図から読み取った内容を基に、図(紋章)について述べた文の正誤を判断する問題である。

選択肢①③は図柄についての文章、②④は図柄についての文章と家系図から読み取っ

た内容を基に判断する。正解は選択肢②であるが、図柄についての文章や家系図には「カペー朝」と明記されていない。この設問では、ルイ9世はカペー朝の王で、クレシーの戦いが百年戦争の戦いであるといった、フランス王家に関する基礎的な知識も問題を解く上で必要と考えられる。

○解答にあたって色々なアプローチが必要な設問

大問2－問6（解答番号 ）

資料1・2から読み取った内容を基に、ファーティマ朝の歴史とそのカリフについて述べた文の正誤を判定する設問である。判断に必要な知識・技能が、選択肢によって異なっている。

- ① イスラーム王朝の成立時期に関する知識（長期的な視点）＋資料1の読み取り
- ② ファーティマ朝の宗派に関する知識（スポット的な視点）＋資料1・2の読み取り
※①②は資料を読まなくても、知識のみで判断はできる。
- ③ ファーティマ朝の首都に関する知識（スポット的な視点）＋資料2の読み取り
- ④ イスラーム国家の分裂に関する知識（広域的な視点）＋資料2の読み取り
※正解は選択肢④であり、教科書に記載がない資料内容が正誤判定のポイントのため、資料を読まない判断はむずかしい。

○地図問題

大問3－問2（解答番号 ）

文章から空欄 がハイチ、空欄 がセントヘレナ島であることを特定した上で、地図中の位置を判別する設問である。ハイチとセントヘレナ島に関する知識と、地理的な知識の両方が必要となる。

○文章・資料から読み取った内容の整理が必要な設問

大問4－問3（解答番号 ）

マラトンの戦いに関する資料に関する会話文中の空欄 と に入れる内容を解答する設問である。「 に入れる語句」は、会話文の最初と最後をよく読むこと、アリストテレスや五賢帝に関する大まかな世界史の知識から判断できる。

「 に入れる人物の名」は、 に入れる語句を判別できれば、 の前後の記述と、資料1から読み取った内容から判断できる。

この設問に必要な知識は古代ギリシア・古代ローマに関する基本事項で、資料や文章をしっかりと読むことで解答できる可能性は高い。ただし、 の内容が文章中に直接的に書いてあるわけではなく文章を読みかえたり整理したりする必要があり、空欄 から と段階を踏む必要のある複雑な形式となっている。

3. まとめ

今年度の共通テストでは、昨年度までの懸念点であった、知識の暗記のみで対応できる設問や、単純な読み取りで解答が絞れる設問は減少した。今年度は、教科書で学んだ世界史の知識と、資料や文章から読み取った内容の両方を組み合わせる必要度が増し、昨年度よりも思考力・判断力といった能力を測るのに適したテストとなったと考えられる。

資料・文章を基に、教科書に記載のない内容も出題されている。これは大学で歴史を学ぶことを意識し、資料から必要な情報を得ること、様々な視点から考察することを重視していると考えられる。このような出題は例年見られ、令和3年度は歴史家マルク＝ブロックの文書資料に関する著書が取り上げられ、令和4年度はジョージ＝オーウェルの文章を基にファシズムに関する異なる見方が出題された。今年度は、具体的な資料が比較されており、異なる地域の貨幣の比較（大問4－A）、マラトンの戦いを伝える資料（大問4－B）に関連する会話文から、類似点や相違点を考察する設問が出題された。今年度の共通テストでは、大学での歴史の学びと設問の内容が、共通テストが始まってから最も無理なく結びついていられると思われる。

今年度の共通テストは、昨年度からの改善点も見られ、世界史の問題としてはよく練られた良問になったと考えられる。しかし、一方の受験生の立場から見ると、昨年度までと比べて急に難しくなり、解きにくい内容となっていたのではないだろうか。

昨年度に比べると、解答に必要な世界史の知識はより基本的な事項となっており、細かい知識は必ずしも必要ではない。しかし、1つの設問に異なる能力（世界史の知識と資料の読み取り）が必要なものもあり、解き慣れない複雑な出題になっていた可能性がある。

世界史の教科書に記載のない内容でも、資料や文章を丁寧に読むことで判断は可能である。しかし、今年度の共通テストは、会話文中心の文章や資料といった文章量が多いため、全部に一から目を通すと試験時間が足りなくなった可能性もある。長めの文章から必要な内容を探す力、読み取った内容を整理する力も昨年度以上に必要とされ、負担が大きかった可能性もある。

結論として、今年度の共通テストでは、昨年度までの傾向を引き継ぎつつ発展が見られた。会話文や資料の分量については調整される可能性もあるが、共通テストの出題のねらいに適した内容となっており、次年度以降もこの傾向は続くと考えられる。ただし、世界史の受験者全員が大学で歴史を学ぶとは限らず、大学の学びを意識したといえる世界史の出題内容は受験生には敬遠されるかもしれない。今後の共通テストでの「世界史離れ」にもつながりかねないことがやや懸念される。

以上